家庭・学校の連携による教育的なニーズに対応した指導・支援
―「連絡帳」記述内容の分析―

中川　宣子
（京都教育大学附属特別支援学校）

Instruction and support in collaboration with families: A content analysis of home-school communication notebooks

Noriko Nakagawa

2011 年 11 月 30 日受理

抄録：本研究では，家庭と学校とでやりとりされる「連絡帳」の記述内容分析から，保護者が子どもの教育的なニーズをどのような視点から評価しているのかについて検討した。結果として，「健康に関すること」「心理的なこと」「人とのつながりに関すること」「状況に関すること」「身体に関すること」「コミュニケーションに関すること」が抽出された。保護者の教育的なニーズは，その時期の中心となるテーマにおいて集中的に現れ，それがサイクルを描いていることが明らかになった。以上より，分析対象の限定性という課題は残されるものの，「連絡帳」がその時期の中核となるテーマを意識して記述することができれば，目的に応じた必要な情報を，子どもの最も身近な関係者である保護者や教師から導き出すことができ，その情報は，日々の教育的なニーズに対応した指導・支援に活かせることが示唆された。

キーワード：家庭・学校の連携，「連絡帳」，教育的なニーズ

Ⅰ．はじめに

今日の教育的なニーズに焦点を当てた教育にとって，子どもに関係する人たちの協力・連携は，不可欠なものとなっている。教育基本法第 13 条にも「学校，家庭及び地域住民その他の関係者は，教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに，相互の連携及び協力に努めるものとする。」とある。特に特別な支援を必要とする子どもの保護者は，子どもの療育へ生涯にわたり携わると共に，子どもの代弁者としての役割も持つため，保護者との連携を効果的に進めることが指導・支援の鍵を握ると言っても過言ではない。

ところが，教師が保護者と協力して支援に携わる関係を構築するのは，簡単なことではない。子どもの捉え方の違いや支援方針の違いから，保護者との間にトラブルが生じ，信頼関係が悪化してしまうといった報告も少なくない。また，具体的な判断基準がないことで，「教育的なニーズ」という用語一つの理解にも，それぞれの立場で微妙な差異が生じてしまう可能性が指摘されている。教師はどのように保護者との連携を構築し，その協力関係を維持すればよいのだろうか。

そこで，日本の特別支援学校の実状を考えると，家庭と学校の間で毎日のように使用され，保護者と教師の密接な連携の一助となっている「連絡帳」が，重要な働きをなすように思われる。「連絡帳」の機能については，宮武ら（1989）が単なる事務的連絡手段に加えて，①保護者との信頼関係，②指導の連携や一貫性，③指導技術の向上，④指導記録，⑤発達の記録，⑥評価の情報，⑦成果の伝達といった多角的な機能を指摘している。

特に特別支援教育では，教師や保護者は，一般的な発達の概念だけでなく，むしろ，日ごとの実践の中で，具

体的な出来事を通して子どもを理解し，子どもへの指導・支援を常に修正，調整し続けている。この実際の指導・支援が，具体的環境の枠組みにおいて把握される子どもの情報に基づいて進められていて，なお且つそれを客観的な方法で対象化する手続きを持つことができることになれば，関係する人たちが共通の基盤を持って互いに情報を交換し合うことができることになり，実践もより的確にフィードバックでき，教育課題・内容の設定や支援内容の最適化も随時進むであろう。

そこで本研究では，このような保護者と教師によって記された，日々の実践の継続的な記録である「連絡帳」に着目し，その記述内容を分析することによって，具体的にどのような視点から，保護者が子どもの教育的なニーズを評価しているかについてを明らかにし，実際的な指導・支援の指標の手がかりの一つを得ることを目的とした。

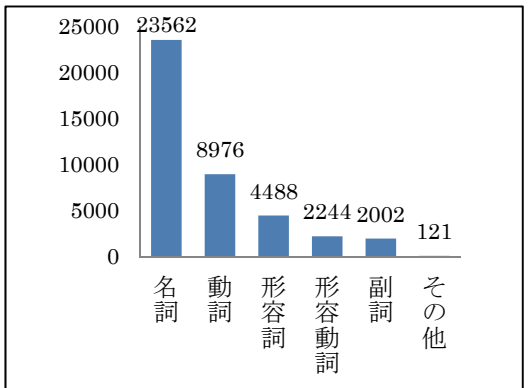
Ⅱ．分析の対象と方法

「連絡帳」の記述内容を，データとして客観的に処理するためには，単位化する必要がある。本稿では，キーワード抽出処理の方法として，フリーターム法（SALTON, 1989）を用いる。フリーターム法は，文書中のあらゆる語のうち，助詞や助動詞などの機能語以外の語をキーワードの候補とする。この方法におけるキーワード候補の抽出方法の基本的な考え方は，複数の文書からなる文書集合が与えられたときに，それらの文書集合中における各文書間の違いに注目し，それらの違いを可能な限り強く識別する語をキーワードとして抽出する，というものである。分析の対象とする「連絡帳」は，Ａ特別支援学校小学部６名の 2010 年４月～2011 年３月までの記録である。分析作業の手順は，１）記述内容を一文単位に区切る，２）一文単位毎のキーワードを色分けする，３）テーマ，カテゴリーの検討と整理をする記述内容の要素分類表を作成する，４）量的分析と質的分析を行う，の４段階である。

Ⅲ．分析の結果

まず，記述内容を一文単位に区切った。例えば，〈おうどん，食べられるようになりました。よほどお腹がすいていたのか，臭いを確認してから「食べる」と言ってくれました。初めてです。〉であれば，〈おうどん，／食べられるようになりました。／よほど／お腹が／すいていたのか，／臭いを／確認してから／「食べる」と／言ってくれました。／初めてです。〉というように，区切る。

次に一文単位毎の助詞や助動詞などの機能語以外の語をキーワードとして色分けし，品詞別に分類した。図１は，保護者６名（ケース(a)～(f)）による記述の品詞別単語数である。ケース(a)～(f)の記述平均は，一年間当たり6878語で，単語のうち名詞句が57%であった。



■図１．保護者記述　品詞別単語数

そこで，この名詞句を中心に要素分析表を作成し分析を進めた結果，「健康に関すること」「心理的なこと」「人とのつながりに関すること」「状況に関すること」「身体に関すること」「コミュニケーションに関すること」に分類できた。

そこで，これらの分類にしたがって，ケース(a)～(f)の記述内容を時系列に，度数分布で表した。ケース（a）の度数分布表が図２，ケース（b）が図３，ケース（c）が図４である。

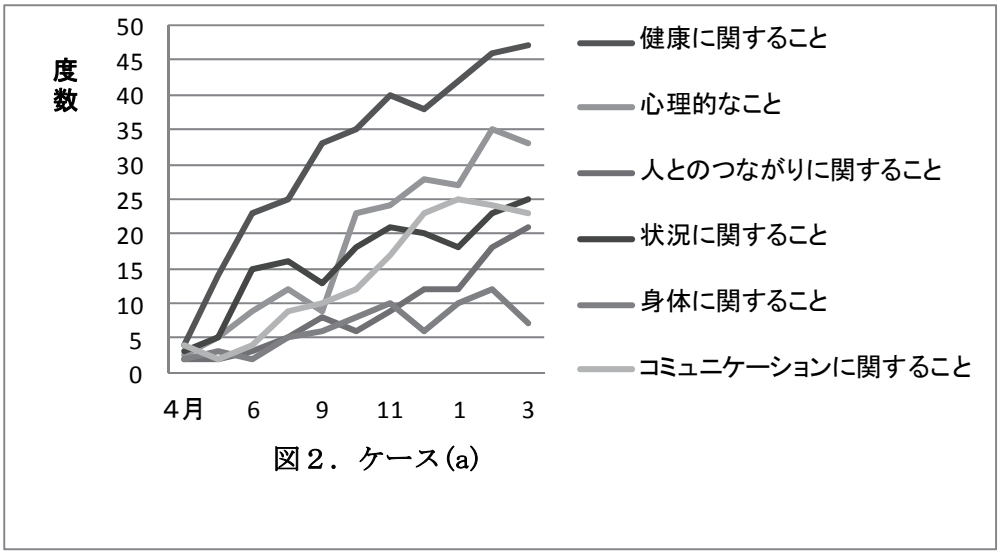


図２．ケース(a)

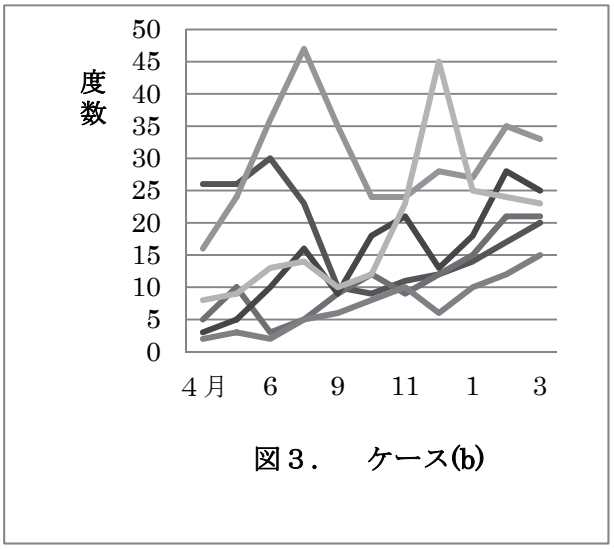


図３．　ケース(b)

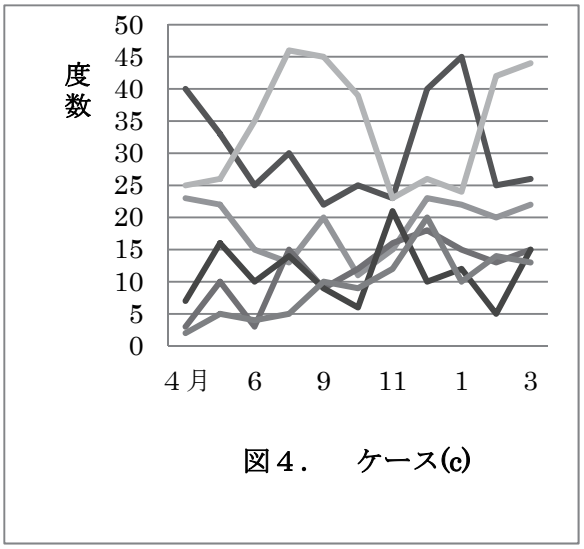


図４．　ケース(c)

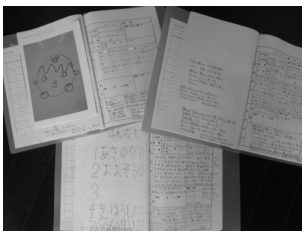


図５．実際の「連絡帳」

Ⅳ．結論と課題

子どもの教育的なニーズを分析するための一方法として，保護者が子どもの教育的なニーズをどのような視点から評価しているかについて分析し，その特徴を論述し，データとしての「連絡帳」の分析方法を提示した。このことから，保護者は必ずしも子どもの行動や状態像の全体にわたって，常に注目し観察している訳ではなく，その時期に特別注目すべきテーマを持って，見つめていることがよくわかる。図２～図４のケース(a)，(b)，(c)のいずれを見ても，その時期に主役を果たしたテーマが変化していることがわかる。例えば，ケース（a）では，1学期から３学期に進むにつれて，全体の記述内容が増加していると共に，その内容の中心は「健康に関すること」であることがわかる。またケース（b）では，１学期後半に向かって「心理的なこと」が増加しており，この時期は親子共に情緒的に不安定な内容が多くあり，このことを受けてコミュニケーション面での指導・支援を実施した結果，不安定さが減少していった様子がわかる。またケース（c）では，前半に「コミュニケーションに関すること」，後半に「健康に関すること」と時期によって中心的な課題が記述されていたことがわかる。このように，保護者の視点は平面的な視点であるよりも，相互関係の上に立った課題解釈的な視点であるといえる。これは相互関係の中で具体的な課題性，問題性を発見するからであろう。このように，教育実践の道程では常に教育的なニーズが平面的に現れているものではなく，その時期の中心となるテーマにおいて集中的に現れ，それがサイクルを描いていることが，分析によって明らかになったといえる。

今後「連絡帳」に記述されている内容を，教育的なニーズを評価する一つのデータとして考えることができるとすれば，これらの知見は重要な示唆を含んでいる。つまり，その時期の中核となるテーマを意識して記述することができれば，目的に応じた必要な情報を，子どもの最も身近な関係者である保護者や教師から導き出すことができ，その情報は，日々の教育的なニーズに対応した指導・支援に活かすことができるようになるからである。またこの情報は授業の改善，特に成果を踏まえた上での新しい教育課程の構築につなげていくことができると考えられる。しかしながら本研究で得られた結果は，あくまでも本研究が分析対象としたデータの範囲内に限定されるものである。今後は，より一般性のある理論生成に向け協力者を増やし，子どもの状態をより適切に表現できる記述方法や，最適な評価の視点が得られるような工夫をし，実際の「連絡帳」でさらに検証を重ねることが必要である。

Ⅴ．文献

１)SALTON,G.(1989)：*Automatic text processing;The transformation,analysis,and retrieval of information by computer.*Addison-Wesley,Reading

２）宮武宏治・高原望・足立由美子（1989）：障害児教育で使用される「連絡帳」に関する調査研究．特殊教育学研究，27（2），pp67－73.

３）中川宣子(2006)：目標に準拠したアセスメント．日本臨床発達心理士会第２回研究大会発表論文集，pp.91-92.

４）中川宣子(2008)：授業視点(デジカメ)記録法を活用した作業学習プログラム開発の試み．日本特殊教育学会第46回大会論文集，p234.

５）中川宣子(2011)：教育的なニーズに対応した授業づくりに関する研究―「連絡帳」分析による試み―．日本発達障害学会第46回研究大会発表論文集，pp.178-179.